

多死社会における高齢者の死への態度と死の迎え方に関する研究 —生涯発達の視点からの提言—

関西国際大学 保健医療学部看護学科

中木 里実

研究報告要旨

今後医療施設のみならず地域での看取りが増加することが見込まれる。これまでの延命主義ではなく、自然な死を望む高齢者が増加することも考えられる。これまでの医療は、治療と延命に主眼を置いていたが、これからの医療は、自然に死を迎える援助法を模索していく必要がある。誰にとっても死は避けられず、高齢者が人生を全うするためには、どのように死に向きあうかが重要なことになってくる。本研究では、統合の途上にある高齢者を対象に生涯発達の視点から自我の状態と自分自身の死を迎える態度について検討し、さらには現代高齢者の死の迎え方についての提言することを目的とした。

本研究では、徳島県内の65歳以上の有料老人ホーム、ケアハウスの入居者、デーサービス通所者等を対象にエリクソン心理社会的段階及び死への態度についてアンケート行い調査用紙の最後のページにて面接調査の対象者を募った。面接対象者3名のEPSI平均点は、171点であり質問紙対象者の中でも統合度が低いといえる。これらが示すように本研究は自我の統合の途上の高齢者を対象としている。

人生の振り返りでは、【実現しなかった夢】、【仕事に対する自負】、【これから訪れるであろう寂寥感】の3つの意味内容を示すキーワードが抽出された。自分自身の死の受けとめ方では、【自分の死の受容】、【ひとりで死ぬことの諦観】の2つの意味内容を示すキーワードが抽出された。

自分自身の来し方を納得することができれば、健康的に人生を全うすることができるのではないかと考えられる。高齢者が満足のいく最期を迎えたいと望むことは自然なことであるが、自分のこれまで生涯を振り返った時に「あきらめ」という受容の仕方があることが明らかとなった。今後さらなる研究によって、この「あきらめ」の中身を明らかにしていくことも重要であると考えられる。また、統合へ向けた介入のための方法として、高齢者間の話りの場づくりや施設スタッフ、ボランティア等による傾聴等についても今後検討していく必要がある。

研究報告書

1. 背景と目的

日本は現在、世界のどの国も経験したことのない超高齢社会を迎えており、これからの日本は多死社会を迎えることが予測される。そのため、今後医療施設のみならず老人ホーム、ケアハウス、及び自宅といった日常生活に近い場所での看取りが増加することが見込まれる。これまでの延命主義ではなく、自然な死を望む高齢者が増加することも考えられる。これまでの医療は、治療と延命に主眼を置いていたが、これからの医療は、自然に死を迎える援助法を模索していく必要がある。誰にとっても死は避けられず、高齢者が人生を全うするためには、どのように死に向きあうかが重要なことになってくる。

中木（2011）は、高齢者の死への態度に影響を与える外的要因として、同居家族の有無や趣味、死別体験等があることを既に報告している。外的要因については、自分の力では変えられないことも多い。そこで本研究では、自分自身が変わることのできる内的要因としての自我の状態に着目する。中木（2014）は既に、発達課題を達成している高齢者は、自分のこれまでの人生を受容していると同様にこれから訪れる人生の終末期をも受け入れていたことを明らかにしている。これまで発達段階の達成途上にある高齢者については研究されたものはない。そこで本研究では、統合の途上にある高齢者を対象に生涯発達の視点から自我の状態と自分自身の死を迎える態度について検討し、さらには現代高齢者の死の迎え方についての提言することを目的とした。

2 方法

1) 対象者

本研究では、徳島県内の 65 歳以上の有料老人ホーム、ケアハウスの入居者、デーサービス通所者等 110 名を対象に質問紙調査を行い、調査用紙の最後のページにて面接調査の対象者を募った。質問紙調査への協力が得られたのは 82 名（回収率 74.5%）で、欠損値が確認された方を除いた 72 名が有効回答（有効回答率 87.8%）であった。男性 19 名、女性 53 名、平均年齢 81.58 歳、SD=6.95 歳であった。尚、この中から 10 名の方から面接協力の記載があったが、健康上の理由などから実際に面接対象となったのは 3 名であった。この 3 名に対して MMSE（Mini-Mental State Examination）を実施し、認知症やせん妄を認めない（21 点以上）ことを確認した。

2) 調査期間

2014 年 7 月～2015 年 10 月

3) 調査手続き・内容

(1) 質問紙調査

目的

調査対象者の自我の発達段階と死への態度との関連を知る。

仮説：自我の統合度が高いほど死の恐怖が低く、接近型死の受容が高くなるのではないかと。

方法

〈質問紙調査内容〉

①フェイスシート

対象者の基本的属性として年齢・性別・主観的健康感・持病・同居家族の有無等について質問した。

②エリクソン心理社会的段階目録検査（Erikson Psychosocial Stage Inventory;以下 EPSI）

エリクソンによって定式化された自我の発達段階図式に対応した心理社会的発達課題の達成感覚を、個人がどのくらい意識しているのかを測定評価し、その個人の自我の状態を全体的に把握する尺度である。中西ら(2008)が日本語版への改訂ならびに再改訂をとおして完成させており、信頼性、妥当性については検証されている。信頼性、自律性、自主性、勤勉性、同一性、親密性、生殖性、統合性の8つの下位尺度によって発達課題の達成度を測定評価する。各下位尺度は7項目で構成されており、全56項目である。「1.まったくあてはまらない」から「5.とてもよくあてはまる」までを5件法で回答するものである。総得点による同一性の達成度の評価も可能であり、各下位尺度をそれぞれの心理社会的発達課題の達成度を示すものとして個別的にとらえることもできる。

③死への態度尺度 (Death Attitude Profile-Revised; 以下 DAP-R)

死への態度に関する5つの因子(死の恐怖、死の回避、中立型受容、逃避型受容、接近型受容)からなる多次元尺度である。隈部(2006)が作成した日本語版は、中立型受容を除く4因子で高い信頼性、妥当性が確認されている。信頼性の低かった中立型受容の因子を削除し、さらに他の4因子についても負荷量の低い項目を削除して22項目とした。「1.まったくあてはまらない」から「5.とてもよくあてはまる」までを5件法で回答するものである。

筆者または各施設のスタッフが調査用紙の表紙の説明を読み上げ説明した後、調査を実施した。EPSI及びDAP-Rについて5件法で回答を求めた。これらの尺度を用いて高齢者の心理社会的発達課題の達成度と死への態度を測定評価した。

分析方法

自我の発達段階の各因子と死への態度尺度の関連について相関係数を算出した。EPSIの各因子とDAP-Rの各因子の相関は、Spearmanの順位相関係数を用いた。

(2) 面接調査

目的

質問紙調査結果と面接調査結果を照合させることで、面接対象者の人生についての受け止め方、困難時の対処法、死への態度等の語りについて意味内容を検討する。

方法

エリクソンの発達理論をふまえて、生まれてから現在に至るまでの出来事やその時の気持などを時系列に振り返りができるようなインタビューガイドを作成し、半構造化面接を実施した。その際、ゆったりとした静かな部屋を使用して行った。面接の最後で「どのように自分の最後を迎えたいか。」「そのために何か準備をしているか等についても質問した。面接内容は、対象者の了解を得てICレコーダーに録音した。

分析方法

面接内容を逐語録に起こし、面接対象者の人生についての受け止め方、困難時の対処法、死への態度等の語りについて意味内容を損なわないように抜き出し意味内容が一致するキーワードで集約した。

質問紙調査結果と面接調査結果を照合させることで、人生の具体的な受け止め方と死への態度について多面的に検討した。

倫理的配慮

調査前に十分説明を行い、対象者が研究趣旨に同意した場合のみ質問紙の回答、及び面接に応じるという形をとった。本研究は、四国大学研究倫理審査専門委員会の承認を受けて実施した。

3. 結果

質問紙調査対象者 72 名の EPSI 下位因子と DAP-R 下位因子の平均点及び各尺度の総得点は以下のとおりである (表 1)。質問紙調査の対象者の EPSI 総得点は 176 点であり、先行研究 (中木、2014) の平均点 186 点よりも大きく低値を示していた。

				n = 72	
尺度	因子名	項目数	総得点	平均点	標準偏差
EPSI	信頼性	7	175.74 (SD=21.92)	21.97	3.85
	自律性	7		22.42	4.02
	自主性	7		21.99	3.70
	勤勉性	7		21.08	4.22
	同一性	7		21.63	4.51
	親密性	7		22.18	3.77
	生殖性	7		21.11	3.70
	統合性	7		23.36	3.46
DAP-R	接近型受容	8	66.82 (SD15.69)	24.81	6.66
	死の恐怖	5		14.21	5.06
	死の回避	5		15.42	4.67
	統合型受容	4		12.39	3.64

72 名の有効回答者の EPSI 下位因子と DAP-R 下位因子の相関係数は以下のとおりである (表 2)。「生殖性」と「死の回避」の間及び、「統合性」と「死の恐怖」との間に有意な弱い負の相関が示された。これは、「生殖性」つまり次世代への伝承、育成の気持ちを持っているものほど自分自身の死を回避しようとする気持ちが少ないこと、自分自身をあるがままに受け入れていることを示す「統合」を達成している度合いが強いほど死の恐怖を感じる事が少ないことが示されている。上記以外については有意な相関は見られなかった。

		DAP-R			
		接近型受容	死の恐怖	死の回避	逃避型受容
EPSI	信頼性	.15	-.11	.12	.14
	自律性	.14	-.22	-.11	.06
	自主性	.00	-.22	-.20	-.07
	勤勉性	.09	.12	.02	-.02
	同一性	.15	-.07	-.20	-.16
	親密性	-.06	-.06	-.10	-.13
	生殖性	.07	-.01	-.31**	-.16
	統合性	.23	-.35**	-.13	-.03

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

3 名の面接対象者の基本的属性等の概要については以下に示す (表 3)。面接対象者 3 名の EPSI 平均点は、171 点であり質問紙対象者の中でも統合度が低いといえる。これらが示すように本研究は自我の統合の途上の高齢者を対象としている。

表3. 面接対象者の概要

対象者	性別	年齢	健康状態	持病	友人	EPSI 合計点
A	男	78	やや良好	有	たくさんいる	151
B	男	89	良好	有	たくさんいる	177
C	女	89	やや悪い	有	たくさんいる	186

面接調査でのこれまでの人生の振り返りでは、【実現しなかった夢】、【仕事に対する自負】、【これから訪れるであろう寂寥感】の3つの意味内容を示すキーワードが抽出された。自分自身の死の受けとめ方では、【自分の死の受容】、【ひとりで死ぬことの諦観】の2つの意味内容を示すキーワードが抽出された。人生の困難時の受けとめ方や対処法では、【気持ちの切り替え】、【辛抱】、【周囲の人との協力】の3つ意味内容を示すキーワードが抽出された。

4. 考察

河合、柳田（2013）は、死を前提に生涯を眺め渡すことの大切さについて述べているが、自分自身の来し方を納得することができれば、健康的に人生を全うすることができるのではないかと考えられる。今回の面接でこれまでの人生を振り返った際に悲しい出来事についても多く語られたが、それらを乗り越えるというよりも「仕方ない」という表現がなされ、あきらめとともに受け入れていることが示された。これらの結果から必ずしも自分自身の人生に満足はしていないけれども、これから来る自分の終末を抗いがたいものとして穏やかに受け止めていたように思われた。高齢になるにしたがって、自分自身の身体機能の衰退、身近な人の死、社会的役割の喪失といった多くの喪失を経験する。それらのものを失っていく寂寥感や孤独感、自分の力ではどうにもできない無力感が、高齢者を「あきらめ」へ導いていると考えられる。

5. 結語

高齢者が満足のいく最期を迎えたいと望むことは自然なことであるが、本研究では、自分のこれまで生涯を振り返り納得して満足すると言うよりもある種の「あきらめ」が語られた。この「あきらめ」も自分自身の人生の一つの受けとめかたであると言えるが、先行研究（中木、2014）での統合を達成している高齢者とは違った人生の受け入れ方であった。今後さらなる研究によって、この「あきらめ」の中身を明らかにしていくことも重要であると考えられる。また、統合へ向けた介入のための方法として、高齢者間の語りの場づくりや施設スタッフ、ボランティア等による傾聴等についても今後検討していく必要がある。

引用文献

【引用文献】

- 1) 中木里実、日本人の死への態度に影響を与える要因、臨床死生学、16(1)、67 - 78、2011
- 2) E.H.Erikson、(仁科弥生訳) 幼児期と社会 1、みすず書房、317-347、1950
- 3) Levinson、D.J.(1978). The season of man's life. New York: Knopf. (レビンソン、D.J. 南博 (訳) ライフサイクルの心理学 上巻、講談社、77-82、1992)
- 4) 岡本祐子、山本多喜司、定年退職期の自我同一性に関する研究、教育心理学研究、33 (3)、185-194、1885

- 5) Nakagi, S, Tada, T、 Relation between identity and attitude toward death in senior citizens、 JMI (The Journal of Medical investigation)、 Vol. 61 .No.1、 2 pp.103-117、 2014. 2
- 6) Rosenthal D.A.、 Gurney、 R.M. and Moore、 S.M.: From Trust to Intimacy : New Inventory for Examining Erikson's S tage of Psychosocial Development. J. youth Adoles.、 10: 525-537、 1981
- 7) Wong、 P. T. P.、 Reker、 G. T. 、&Gesser、 G. The Death Attitude Profile-Revised: multidimensional measure of attitude towards death. Neimeyer、 R.A.(Ed) *Death Anxiety Handbook: Research、 instrumentation、 and application*. Washington DC: Taylor & Francis. 121-148(Chapter 6) 、 1994
- 8) 中西信男、佐方哲彦、EPSIーエリクソン心理社会的段階目録検査一、上里一郎編、心理アセスメントハンドブック第2版、365 - 376、西村書店、2008
- 9) 河合隼雄、柳田邦男：心の深みへー「うつ社会」脱出のためにー 新潮文庫、47-55、2003
- 10) 内閣府平成 25 年版高齢社会白書 2013 :
<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html> (アクセス日 : 2015/09/10)